

平成 23 年 1 月 12 日

平成 22 年度特別支援教育冬季研修講座 探そう！特別支援教育のヒントに参加して

せたな町立若松小学校
教頭 佐々木 朗

1. はじめに

自分にとっては、特別支援教育元年と思って、今年はできるだけ特別支援教育に関わる研修会に参加しようと心に決めた。夏にも特別支援教育センターに行って、全道からたくさんの先生方が集まっている熱気と一流の講師によるお話で、とても有意義な研修会だったというのもあり、冬の研修会も参加することにした。



北海道立特別支援教育センター(通称特セン)は、円山動物園の裏手の小高い丘の上であり、児童相談所、児童総合相談所、特別支援教育センターの3つの建物が建っている。このような3つの施設が集まり、廊下で一直線に結ばれているというのは、全国的にも珍しい。そのコンセプトは、互いの連携というあたりにあるという。20年ほど前に立てられたというが、とてもきれいな建物である。今回の冬の講座にも名簿上242名のエントリーがあり、会場は教育関係者であふれていた。

2. 私の受けた研修

(1)「保護者支援で大切なこと」

北海道立特別支援教育センター職員

(2)「ソーシャルスキル・トレーニングの実際」

北海道立特別支援教育センター職員

(3)「発達障害と虐待」

関係

職員

3. 感想とまとめ

(1)「保護者支援で大切なこと」

特別支援学校学習指導要領解説には、保護者に対する支援として、①保護者が我が子の障害を受容できるように、②将来の見通しについての過度の不安を取り除くようにとあり、「保護者の思いを受け止め、精神的な援助や養育に対する支援を行うように努める必要がある。」と示されている。

保護者視線の基本として、①子どもの最善の利益を考慮する。②保護者ととともに、子どもの成長の喜びを共有する。③一人一人の保護者の状況を踏まえ、適切に援助する。④相談や助言にあたっては、保護者の気持ちを受け止め、相互の信頼関係を基本に、保護者一人一人の自己決定を尊重すること。⑤プライバシーの保護、シリアたこ

とがらの秘密保持に留意すること、があがれられている。

特センでは、ペアレントトレーニングと称して、保護者たちの支援を行っている。目標は、親と子どもの関係性を少しでも良い方向に向けるための考え方のヒントといったことを学びあうことである。

子どもとの関係を改善するために、悪循環を断ち切るということが大切である。問題となる行動→困った子、手に負えない→叱って失敗→認め合えない→子どもの反抗→親のイライラ・落ち込み→問題となる行動、となりがちである。それをどこかでほめてプラスの親子関係にしていくことが大切である。

子どもと関わる時、時には良くない行動に対して「目をつむる」(無視)して、良いことをほめてあげるように努める。ほめることが多くなると目をつむる(無視)することが少なくなる。

子どもへの指示の出し方として、①注目させる。②視線を向ける。③指示はできるだけ短い言葉で。④やらせるときはキッパリ、⑤すかさず褒める、⑥指示の繰り返しの有効性

ペアレントトレーニングを受けた感想として、①同じようにされている方と話す機会がなかったあらかたの自分の子とを書いた。かかる機会になれた気がする。②同じお子さんをもっているやと話す機会がなかった。③自分や子どもの悪いところばかりをみていたと気づけて、こんなこともできるという見方がわかった。

感想

「自分の子どもに障害がある。」と知った時の親の気持ちとしては、相当に驚き、シ

ョックを受けるであろうことは容易に想像することができる。そこからどう気持ちをプラス思考に変えていくかが大切であり、孤立させないということが大切であると思う。今回のペアレントトレーニングに関しても、最初は「参加しようかどうか。」という気持ちがあったと思うが、参加してみて、とても良かったという感想が得られている。

障害を持つ子どもの指導や養育について、親の自己流ではなく、同じ悩みを持つ方々や専門家のアドバイスをもらうことが大切だとうことがよくわかった。

一方、関係機関としては、親が心を開いて話をできるよう、日常の連携を大切にするとともに、適切なアドバイスをしていくことの大切さを感じた。

(2)「ソーシャルスキル・トレーニングの実際」

ソーシャルスキルとは、①社会集団の中で、意図的に人とうまく関わっていく技能(スキル)②そのための訓練をソーシャルスキル・トレーニングという。社会を送るために必要な技能と技能の使用を学ぶことで人との関係を築き、円滑な社会生活を送る。

ソーシャルスキル・トレーニングをしていくための手続きとして、実態とニーズを把握することが大切である。

・行動観察法として、ABC分析、日常生活場面の分析などがある。ABC分析とは、先行事象(Antecedents)何が原因か、行動(Behavior)どんな行動をとる?、結果(Consequences)その結果は?に分けて、行動を観察するものである。下の図は、「授業

中に、妨害する、おしゃべりをする、人に 受け止める。③相手の感情や気持ちを理解する。ということが大切である。

ABC分析

▶ 授業中に、妨害する、おしゃべりする、人に手を出す

不適切な行動が強化される

先行事象 (Antecedents) 何が原因か?	行動 (Behavior) どんな行動をとる?	結果 (Consequences) その結果は?
<ul style="list-style-type: none"> ・勉強がわからない ・集中できない ・関心のある話 ・つまらない ・主張が通らない 	<ul style="list-style-type: none"> ・いすをがたがたさせる ・大きな声をあげる ・勝手に話す ・隣の人に手を出す ・暴力を振るう 	<ul style="list-style-type: none"> ・周りが騒ぐ ・先生が注意する ・話に反応する ・みんなが注目する ・脱教される
	<ul style="list-style-type: none"> ・質問をする ・状況を説明する ・手を挙げて発言する ・できる課題に取り組む ・話し合う、遊ぶ 	<p>不適切な行動を 分析し、適切な 行動を教える</p>

手を出すという児童の分析である。

この例の場合、児童は勉強がわからないと椅子をがたがたさせ、その結果周りが騒ぐ、また、集中できないと大きな声を上げ、先生に注意を受けるという循環を繰り返すことになる。

結果を変えるためには、中央の欄の不適切な行動について分析し、適切な行動を教えるということをしていく。勉強がわからないのであれば、できる課題に取り組ませるとか、勝手に話すのに対して、きちんと質問をさせたり、手を挙げて発表させたりするなどする。少し方向を変えて、それができたらすかさず、褒めるという方法をとっていく。

また別のやり方として結果を変えるということもありうる。周りの児童に対して、沢がないようにするなどである。しかし、無理がかかることが多いので、難しい手法である。

また、指導者のスキルとして、①積極的

に話をするときの注意としては、①冷静に話し合い、感情的にならない。②個どもの話を最後まで聞いてから反論、③「ちゃんと聞いているよ」の姿勢。④論点を一つにする。⑤大人が切れない工夫を。

感想

わからないから騒ぐ、騒ぐと叱られる、という悪循環に

なりがちである。それを断ち切るためには、指導者の「ほめる」というスキルを身につけることが大切である。

子どもの行動を認めつつ、「でもね。」と語りかけ、少しでもいいところが見えてきたら「ほめる」という繰り返しが子どものソーシャルスキル向上につながるということがわかった。

自分自身も若い頃から「ほめる教育」というものを大切にしてきた。そしてほめるポイントは、その場でほめること、何がいいのかをはっきりさせてほめるということである。はっきりしないけれどもほめることをしていくと、その子は、「鼻が高くなる」ということである。

また、叱る時は、事情をしっかりと聞く、何が悪いのか、どうすべきだったかを明確にした上で、納得させることが大切である。しかられて、ある意味「すっきりした」という気持ちになれるよう、子ども理解をしていくことが大切であろう。

(3) 「発達障害と虐待」

近年DVの目撃が通報されることがおおく、児童虐待の数は、増加傾向が続いている。虐待には、①身体的虐待、②ネグレクト(育児放棄)、③心理的虐待、④性的虐待がある。そして、虐待される児童の半数以上が何らかの発達障害を持っているというデータがある。

感想

これも繰り返すようだが、親子関係の悪循環が招いていることが大きいと感じた。子どもがわからないでちょっとした悪事をはたらく→親にこっぴどくしかられる。ひねくれて、また、悪事をはたらくという繰り返す。そして、叱ることの中に憎悪こそあれ、愛情が欠如してしまうという状態ではなかろうか。

昨年のものであろうか、学校に来た里親の手記が綴られた冊子を持ち帰って読んだ。子どもを引き受けた親、そして、里親の元でそだった子ども。読んで感じたのは、人間関係は、血のつながりよりも、愛情で結ばれた関係の絆の方が太く、強固なものであるということである。親からの愛情を十分にもらえずに施設で育ち、心を閉ざした子ども、里親のもとで愛情をたっぷり受けて育ち、大きくなり、自分のこれまでの生活を振り返ることができるような年齢になった時、里親への感謝の言葉を手記として綴ることができるまでに人間として強く成長している。

児童虐待をなくすためには、子どもも親も孤立させないということが大切であろう。近所つきあいから始まって、学校を含めた関係機関の粘り強い声かけが、親や子ども

の心を開いていくことを大切にしていきたい。

4. さいごに

かつてギリシャのアリストテレスは、「人間は社会的動物である。」と述べた。人間は、文字通り、人と人の中で生きるものである。

社会全体が個人主義的になりつつあり、隣に住んでいる人の名前や顔さえ知らないというのが都会では、当たり前になりつつある。悩み事を相談する人もいない。唯一つながっているのは、ネットを通じた社会だったりする。

子どもは、障害があろうとなかろうと幸せに生きる権利を持っている。また、親は、そして社会は子どもが健全に育てる義務があろうと私は思う。

特に発達障害を持つ子どもについては、繰り返すが「連携」が必要であり、決して「孤立」させてはいけないということを今回の研修で改めて、感じさせられた。

今回の特別支援教育センターを始め、市町村にも、相談機関は用意されている。また、私たち自身も子どもの悩み、保護者の悩みや相談に対応できるようスキルアップをしていくことの大切さも強く感じた。

